

Title	始皇本紀を讀みて : 阮儒史實の一説に及ぶ
Author(s)	今西, 茂喜
Citation	懐徳. 1926, 4, p. 2-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88721
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

れを求め去られたが、光緒の中頃
に當つて(千九百年―千九百一年)
英國印度政府派遣する所のハンガ
リー人スマイン博士が古を我が和
國に訪ふて、尼雅河の下流廢址に
於て、魏晉間の人が書いた所の木
簡數十枚を得た。嗣いで光緒の末
年(千九百〇六年―千九百〇八年)
前後して羅布渾爾の東北故城に於
て、前後晋初の人が書いた木簡百
餘枚を得た。(原物は均しく英國博
物館の收藏に歸した)是は皆佛人
チャバンス教授の考釋を経て、其
の第一次得る所は、ス氏の和蘭故
蹟中に印せられ、第二次得る所は
別に專書となり、民國二年三年の
間に出版された。此の項木簡中に
は古書(蒼頡篇急就篇等)曆日方
書があるが、其の大半は皆屯戍簿
録である。(また公文案卷信札等も
ある)史地二學に於て關係極めて
大なるものである。民國二年の冬
チャバンス教授は、其の校訂未印
成の本を羅叔言參事に寄せたので
羅氏は余と與に重ねて考訂を加へ
スマイン氏が和蘭に於て得た所の
ものとを併せ、景印して世に行ふ
た。所謂流沙瑣簡(民國三年四月
出版、譯者云三冊)是れである。
此の外露國人ヘドニーも亦得る
所があり、また日本人大谷光瑞が
得る所西域圖譜一書がある、併し
其の中木簡はただ吐魯番の二三枚
のみである。(未完)

始皇本紀を讀みて

阮儒史實の一説に及ぶ
今西 茂喜

司馬遷の秦及始皇本紀を叙するや
筆意高遠、行文明潔、殊に豪邁果
敢の始皇の爲人を以てして、其潑
瀾たる性情を發露するの文中、鬼
氣ありて宛然眼中其人を見るの思
あらしむ、現に帝の果斷の態を形
すに、往々(怒)(大怒)の文字を冠
して、以て四圍の史實を躍動せし
むるの妙、不覺打案快を呼ばしむ
るものあり、素是れ先天的貴族の
出として、遙蕩恣睢小節に拘拘た
らず、遠大の希望を懐くの半面に
は直情徑行後圖の慮少く、爲めに
享國の多祥ならざりしは痛惜に堪
へず、其偉勳中屈指すべき(一)僅
々十三歳にして即位し、爾後十年
にして六國を戡定し、(二)李斯、
尉繚子等の俊才を任用し國政に與
からしめ、周公の制せし諡號を廢
して君臣父子の大義を絶對ならし
め、以て自から古を成し、文化革
新に急なる、大篆に代ふるに小篆
を以てし、更に程邈を獄中より起
して隸書三千字を制せしめ、直に
之を御史に擢用し、(三)嫪毐の亂
に一朝の怒に乗じて太后を遷した
るも、一布衣茅焦の諫を容れて大
后を咸陽に遷し奉り、(四)居常敬
神の念に篤く、雲夢に舜帝を望祀
し、會稽に大禹を祭り、而して大
置として當然謳歌すべし、後世儒
者の下せし(暴秦)又(虎狼秦)の評
語は失當の極と謂ふべく、但、遷

餘、徐福をして齊の童男女二千人
を齋戒沐浴せしめ、吾邦に渡航せ
し敬虔の態度と、(五)國論統一の
必要上、博士官の外詩書百家の書
を藏するを禁じたるも、盧生侯生
等の始皇の旨に忤ふに及び、諸生
等を案問するに(諸生傳相告引、
乃自除者四百六十餘人)見て、彼
等の腐腸敗肝を憤るの末、之を阮
殺せり、余思ふに、始皇の爲政の
上乘なるもの坑儒實に其一に居る
而して坑殺方法に至つしは古來史
傳無し、余頃日東坡詩注を讀み、
一詩を得て之を知り、不覺掩卷痛
快を叫ぶに至る、

飲酒臺

蘇東坡

博士雅好飲。空山與誰娛。莫向驪山
去。君王不得儒。

注史記所載坑儒、止曰坑之咸陽
而歐陽率更難於瓜部中、載右
文奇字云、始皇密令人種瓜驪
山研谷中、瓜實成、令人上書
曰、瓜冬有實、有詔下博士諸
生、說之人々各異、則皆使往
視之、而爲伏機、諸儒生皆至
方相難不決、因發機從上皆壓
殺。

秦皇山來超世的大偉人にして、當
時の凡庸國民に君臨するには、餘
りに賢明の天子たりし也、故に博
士輩の喙々の聲に耳を假して國政
を料理するは不可望の事に屬す、
其上彼等の資性陋劣怯儒にして、
不足侍事は疾に皇帝の看破する所
にして、焚書坑儒固より必然の處
置として當然謳歌すべし、後世儒
者の下せし(暴秦)又(虎狼秦)の評
語は失當の極と謂ふべく、但、遷

教育と進修に就て

稲田 穰

頃日學年替りの場合、例の中等以
上の諸學校に於て、選拔試験の混
雑は相變らずの次第にて、言はゞ
己れの學才杯には全く頓着せず、
猫も杓子も、家庭の事情相許す限
り、男女となく、無暗と高級校の
入學を志望するの有様にて、其學
校卒業後の處世方針杯に到ては、
本人は固より父兄に於ても、未だ
全く決定し居らず、加之彼等中
には、中學校教科の性質すら能くは
辨知せず、兎に角中學史は卒業せ
ねばならぬと爲し、甚しきは、高
等小學校二三年の代りに、切ては

其の二年丈にても、中學若は女學
校へ入れたしと希望するものさへ
あり、誠に笑止の至なり、余曾て
地方郡宰の職に在り、當時の事情
今日に相及ばざる遙かなるものあ
りしに不拘、余は切に此の無意義
なる向上心の勃發を憂ひ、懇ろに
中等實業教育の奨励に努め、就中
高等教育を欲求するものと雖も、
可成専門學校に向ふを期せしめた
りしが、目今の情況は層一層益々
其弊に堪へず、兎に角大學に入ら
ずんばの意氣込愈々盛なるものあ
るに至れり。
而して其大學や専門校の卒業者は
如何にと見るに、近來の如くにて
は職業の選擇杯無論本意に任せず
辛くも何等かの職務に在り附くを
以て満足せざるべからず、甚しき
は實業側の如き、學歴の高き丈就
職の難きを加ふるの有様にして、
科學的智識を職務上に應用するが
如きは、到底望むべきにあらず、要
するに學歴は求職の場合、履歷書
を飾るの一要件に過ぎずして、今
は却て其高ければ高き丈就職難を
加へて、全く自繩自縛の感なき能
はず、殊に女子に在ては女學校は
先づ可なりとするも、高等の教育
を加ふるに隨ひ、反比例に、婦德
上如何敷行動相現はれ、遂に家庭
にさへ容れられ難きものあるに至
るは浩歎の外なしとす。
如斯は現行制度に於ける文官任用
令なり、官公吏登庸上の手續、又
は試験規則の不備不用意の結果に